

---

# 僕は彼女の手の中で

カドクラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は彼女の手の中で

### 【Nコード】

N2078D

### 【作者名】

カドクラ

### 【あらすじ】

世界のだれよりも美人で、テストでは常に満点を取るような天才、さらにはどんなスポーツも簡単にこなす完璧な彼女の手の中で転がされる少年。

## 第1話

「人間は誰にでも怖いものがあるじゃん」

僕が顔をマグマのように熱くしながらこんなことを言うはめになった原因は彼女にある。

名前は近藤奈緒。造形美ともいえるほど整った顔立ちに、夜空に煌めく星のような金色の髪、無駄のないスリムな体型、ようするに容姿端麗。それでいて常に全教科満点しか取らないような天才的な頭脳を持つ。しかも運動神経も抜群。天に二物も、三物も与えられた羨ましい人だ。

そんな彼女となぜか幼馴染で家が隣り合わせな僕は、小さな頃から虐げられてきた。

ついさつきも苛められたから、あんなことを吠えていたのだ。

「男のくせに？」

そう言うと、奈緒の可愛らしい口元が僅かに綻ぶ。

男として、こういう時には怒りの感情一つでも覚えなくてはいけないのだろうが、憤慨するよりも先に彼女に見とれてしまう。十四年間ずっと一緒にいるのだが、未だに慣れない。

だからこういう時は、思いつきり首を振って意識を逸らす。その後、視界に彼女が入らないように少し俯いた。

「……だつてさ」

「なに？」

「ゴキブリだよ？」

その名を口にしただけでも全身にムカデが這ったような悪寒が走る。

あの妙に光沢のある茶色い羽、長い触角、やたら機敏に走る姿、何かかわしゃわしゃと動めく口。全てが気持ち悪い。この世の中で一番苦手だ。

彼女はそんな悍ましい生き物の

「ほら」

「きゃあっ!」

奈緒が腹を抱えながら笑い転げた。体が熔鉱炉の中にほうり込まれたように熱くなる。

「たかが玩具ごときで女の子みたいな声出しちゃって。しかも二回目なのに」

それだけ言うと奈緒はうつすらと目に涙を浮かべ、再び大きな笑い声を上げる。

玩具とは思えないほど精巧に造られたゴキブリのフィギア。そんなの、二回目だろうが三回目だろうが普通に驚くだろう。

「奈緒だって、苦手なものぐらいあるでしょっ」

笑い声が止まる。すると奈緒は涙を拭き、はあはあと肩で息をしながら言う。

「ないわよ、そんなの」

確かに彼女は完全無欠の超人だけど、苦手なもの一つくらいあるはず。

「へビは?」

「大好きよ。ずっと首に巻いていたいくらい」

「虫とかは?」

「虫も好きよ。私が虫の標本集めてるの知ってるでしょ」

「じゃあ、犬とか猫は?」

「私がジョンとミケ飼ってるの忘れたの」

「じゃあ、ピーマン」

「私好き嫌いはしないわ」

奈緒が勝ち誇ったように鼻を鳴らす。完全に僕の負け。しかし、彼女の完璧ぶりがなんだか悔しくて、再び尋ねた。

「本当に、本当に苦手なものないの?」

すると突然、さっきまでの威勢の良さが無くなり、しおらしくなった。透けるように白い肌が、ほんのりと赤みを帯びていく。

「どうしたの?」

彼女の豹変ぶりに堪らず僕がそう言っていると、彼女は恥ずかしそうに視線を逸らす。

「じ、実はね私」

「うん」

「遊園地が怖いのに」

衝撃の発言に、思わず耳を疑った。

「……人込みが苦手だったっけ？」

「違うの。遊園地自体が嫌いなの」

奈緒は本当に恥ずかしがっているようだし、嘘を付いているようには見えなかった。しかし遊園地が苦手だなんて、俄かには信じがたい。頭がこんがらがった。

「えっと、なんで？」

奈緒は瞳に涙を浮かべ、形のいい唇をきゅっと噛み締める。

「だって怖いじゃない。遊園地ってなんか怖いじゃない」

長年付き合ってきて初めて知った彼女の意外な弱点。少し可哀相だけど、これを利用しない手はない。

奈緒の虐めに耐え続けて十四年。やっと、長年の怨みを晴らす時が来たのだ。

しかも運の良いことに、この辺りには割と名の知れたテーマパークがある。そこに連れて行けば絶対に怖がるはず。

復讐の鬼となった僕は、その次の日には二人分のチケットを取った。お小遣では足りなかったので貯金まで下ろしたが、奈緒の怖がる顔が見れると考えたら安いものだ。

そして翌日。

学校へ向かう僕の隣には、制服に身を包んだ奈緒が、朝日を受けて眩むような黄金の髪を揺らし歩いている。

何の変哲もない、何時もの登校風景。だが、今日は少し違う。今日、僕はがちがちに緊張していた。

奈緒みたいな可愛い女子と一緒に学校へ行くので、毎日少なから

ず緊張はしているが、今日はその度合いが違った。緊張のメーターが完全に振り切っている。そのせいか、大して歩いたわけでも、気温が高いわけがないのに汗がたらたらと垂れてくる。

このままでは不審に思われると思い、僕は早々に話しを切り出した。

「あのさ、奈緒」

「なに？」

奈緒は眠そうな声で返事をする。怪しんでいる様子はない。僕は小さく深呼吸をして、適当に思い浮かんだ言葉を口にした。

「親が遊園地のチケット貰ってきたんだけど、よかつたら明日一緒に行かない？」

すると奈緒は、バラを散らしたように頬を赤く染め、横を向いた。そして、絞り出したような声で言う。

「……二人だけで行くの？」

「えっ、うん」

ちらつとこちらを見た彼女は、頬だけでなく耳まで茹でも上がっていた。

遊園地という言葉聞いただけでここまで拒否反応を起こすなんて、遊園地に行ったらどうなるんだろう。そう思うと少し不安になった。

「っていうか、私が遊園地怖いって知ってるくせに、なんで私を誘うのよっ」

そう言うと奈緒は僕の頭を叩いた。彼女は結構力が強いので、頭が痛い。そして良心も痛かった。やっぱり僕には、復讐なんて似合わないようだ。

「ごめんね。違う人を誘うよ」

別にチケットが使えなくなったわけではないし、クラスの友達とでも

「別に行かないなんて言っていないでしょ」

「えっ？」

驚いて思わず立ち止まると、奈緒も同じように止まる。彼女はもじもじしながら俯き、顔を真っ赤にして僕を怒鳴り付ける。

「ここで断ったら、私があんたに負けたみたいじゃない。私、負けるの嫌いな。だから、一緒に行つてあげようと思つてたのっ！」  
呆然としている僕を他所に彼女は続ける。

「どこに行くのよ？」

「えっと、ネズミーランド……」

「じゃあ、明日八時にバス停ねっ」

それだけ言つと奈緒は、凄い勢いで走り去つてしまった。

結局この後、奈緒には一度も話して貰えず、気まずいまま一日を過ごした。

当日。

待ち合わせ場所のバス停までは歩いて十五分程度。家を七時半に出れば十分間に合う。

歯を磨いて、顔を洗つて、寝癖を直してなど、もろもろの準備を終えたときには出発の時間を過ぎていて、僕は慌てて家を出た。

でも、よく考えれば家が近いんだし、待ち合わせする必要がないよんじゃあ。などと考えながら小走りでバス停へと向かう。

休日ということもあって、ネズミーランド行が止まるバス停の前には沢山の列を作っていた。

「遅いわよ」

黄金よりも美しく輝く髪を持つ少女が、普段見たこともないオシヤレな服に身を包み列に並んでいた。その姿は、まさに息を飲むような美しさで、思わず見とれてしまう。

「なによ、なんか可笑しい？」

僕の視線に気づいたのか、奈緒が少し照れたように言う。

可笑しいどころか似合いますぎてて、そのままミスユニバースにでも成れるんじゃないかと思うほどだったが、上手く言葉が出てこず、僕は必死で首を横に振った。そんな僕を見た彼女は、腕を

組み自慢げに胸を張る。

「まあ元がいいから、どんな服でも可笑しいってことはないけどね」  
その通りだと思った。やっぱり、元がいい人は得だ。

しかも気付いてみれば、バス停に並ぶ男の人の視線はほとんど奈緒に集中している。中には奈緒を見すぎて、自分の彼女に怒られている人までいる。そして奈緒と話す僕には、男性からの殺気が混じった嫉妬の目が向けられていた。やっぱり、奈緒は美人なんだ。

「ほら、ぼけつとしてないで。バスが来たわよ」

そんなことに気づいてないのか、慣れているのか、彼女は気にする様子もなくバスへと乗り込む。その後ろを、僕は少々の身の危険を感じながら付いていった。

バスに乗ること三十分。

体中に穴があくほど鋭い視線になんとか耐え、目的地のネズミランドに着いた。

バスを降りると見えるのは沢山の人込みに、華やかなゲート。そしてゲートの上にはジェットコースターや観覧車、フリーホールなどが顔を覗かせている。改めて遊園地に着たんだなと実感した。

「早く行くわよ」

声が聞こえた途端、僕の手が柔らかく温かい物に包まれた。何かと思い見てみると、奈緒の手が僕の手を握っていた。

「……」

頭が真っ白になった。だけど、握られた手は真っ赤に染まった。

「こ、怖いんだからしょうがないでしょ」

そう言うと、奈緒は僕を引っ張って遊園地へと入る。

手を握られていることで頭は骨抜きになってしまい、僕は彼女のなすがままになっしまった。

「あー、遊園地って怖いわあ」

遊園地が怖いはずの彼女は、とても楽しそうにネズミランドを

満喫している。今も四回目のジェットコースターを終えたところだ。

「……………本当は遊園地なんて怖くないんでしょ」

奈緒に悪びれる様子はない。

「当たり前よ。遊園地が怖いわけじゃないじゃない」

「どうやら、復讐なんて初めから出来なかったようだ。単純な僕は、上手く彼女に乗せられていたのだ。」

そう気付いた時、僕は自然と彼女に尋ねていた。

「奈緒って、本当は何が怖いのか？」

すると、奈緒は小悪魔的な笑顔を浮かべて言う。

「そうね……………。あそこのカフェでお茶するのが怖いわ」

それでも、遊園地が怖いからと言って握られた手は離されること  
がなかった。

## 第1話（後書き）

連載始めました。よろしくお願いします。

## 第2話

その日の夜。布団の中で、空っぽになった預金通帳を見ていると自然と枕が湿った。

これからは一ヶ月、親から貰える二千円で生活していかなければならない。それだけでは、友達とゲームセンターも、カラオケも、映画も行けない。缶ジュースを買うのもきつくなってしまおう。ゲームを買おうと思ったら、三ヶ月はお小遣いを全額貯めなければいけない。

元はといえば、くだらない復讐なんて考えた僕が悪いのだが、先のことを思うと気持ちが悪んだ。

自分が悪いんだし、暗いことばかり考えていてもしょうがない。明日になればなんとかなる。そう自分に言い聞かせながら、預金通帳を枕元に置いて僕は目を閉じた。

まぶたの裏には怖がる奈緒の姿が焼き付いていて、なんとなく幼稚園のことを思い出した。

今とは立場が逆だった幼稚園時代。  
昔から可愛くて、頭が良くて、運動ができる万能人間だったのは変わらない。だけど、いつも僕の後ろにいて、か弱い妹のような存在だった。

知らない人が来たから、犬が怖いから、虫が怖いから、そう言っ  
ては僕の後ろに来た。僕もそれが嫌ではなかったし、そんな奈緒を守ってあげたいと思ってた。

今のような性格になる、あの事件までは。

幼稚園の年長の時に起きたパンツ事件から、彼女は変わったのだ。

体中の水分が蒸発するのではないかというぐらい暑い夏の日。僕と奈緒は母親に連れられて、近くの市民プールに遊びに行った。

幼い二人はすぐに水着に着替えて、子供用プールでがむしゃらに

遊びまくった。

競争したり、水鉄砲や小さなウォーターライダーで遊んだりしている、いつの間にか時間が過ぎていて、僕らは帰ることになった。

僕は一人で男子更衣室へ行き、体を拭き、服を着る。その時間、僅か三分ほど。しかし、女性達はまだ着替え終わっていないように、出口に奈緒達の姿は無く、僕は一人寂しく待っていた。

せつかくプールで冷やした体が再びほてり、汗が滲んできた時、母親とやたらもしもじと歩く奈緒が見えた。なぜだか様子のおかしい奈緒が気になって、どうしたのか尋ねてみると、奈緒の顔が灼熱の光線を放つ太陽よりも真っ赤に染まる。

そのまま黙り込んでしまった奈緒に代わって、母親が説明してくれた。「奈緒ちゃんのパンツが無くなった」と。

幼稚園児だった僕はそれを聞いても大して驚かなかった。むしろ下が涼しくなっていていいじゃん、と言って奈緒と母親に殴られた。

奈緒はあの当時から「人前で裸になるのは嫌だ」というませた子供だったので、パンツが無いのが相当嫌だったのだろう。ついにはその場で、大泣きし始めてしまった。

ちょうど僕は替えのパンツを持って来ていて、貸してあげようと思いいリュックを開いた。

ぐちゃぐちゃに丸めたバスタオル、その下から顔を覗かす青い海パン。そして、着替えのパンツが入っている袋の中には僕の戦隊ヒーローが印刷されたパンツの他に、ピンク色のふりふりの付いた可愛いパンツがあった。

思わず声が漏れた。

明らかに僕のものではない女の子用のパンツ。

勿論、盗った覚えなんかない。確かに奈緒は可愛いけど、パンツを欲しいなんて思ったことはない。しかし、僕の体中からは冷汗が止めどなく溢れ出ていた。

断じて盗っていない。神様と仏様、キリスト様に誓っても盗って

いないのだが、なぜか体の震えが止まらなかった。

そんな僕を不審に思ったのか母親が声をかけて来た。僕は慌ててリュックを隠す。

必死にリュックを隠す姿を見て母親の中で何かが繋がったのか、僕に疑いの目を向けてきた。繋がったのはたぶん、僕の行動と無くなった奈緒のパンツだろう。母親は顎に手を当て、名探偵風に「はは〜ん」と呟く。後ろで大泣きしていた奈緒が、一瞬笑ったように見えた。

その後は、竹を割るような勢いで僕が犯人に近づいて行った。僕も必死で抵抗してみたものの、全くの無駄だった。

奈緒は今まで泣いていたことを感じさせないほどの満点の笑みを浮かべて、僕に言った。

「奈緒に指輪買くれる？」

母親も大きくうなづいていた。

結局、無実なのに僕は、言うことを聞いた。あの当時の僕に、母親達の言葉責めを耐え切れるほどの精神力なんてなかったのだ。

それからというもの、僕と奈緒の立場は少しづつ代わっていった。今では毎日振り回され放題だ。

まあ、基本的にそんなに酷いことはされないのだが、いくつかつラウマになっていることだってある。そのせいで僕は、奈緒以外の女子とろくに話が出来なかったりもする。

いろいろと考えていたら、途方もない悲しさが込み上げてきた。枕をビチヨビチヨにする前に考えるのを止め、今度こそ本当に眠りについた。

月曜日と思って早く起きたら、今日は日曜日だった。

少し得したような損したような、なんともいえない気分では布団から出た。

顔を洗って歯を磨いて、朝ご飯を食べに居間に行く。たぶん母親は起きていないので、朝ご飯は好きなものが食べれる。なので、久

しぶりにシーチキンでも食べようかななどと考えていると、居間に着いた。

窓から黄金の朝日が差し込み、いつも見ている居間がなんとなく違って見える。学校のある日は時間がなくてゆっくりできないので、のんびりとした朝はとても優雅で、いい気分になれた。

いい気分の中、さっそくシーチキンを頂こうとキッチンへ向かう。そこには見慣れているけど、見慣れない姿があった。

「あ、おばさん？ おはようございます」

可愛いピンク色のエプロンを宙に舞わせ、勢いよく振り返る金髪の美しい少女　奈緒が僕の家キッチンにいた。

思わず言葉を失った。奈緒も、顔を赤く染めて固まっている。

しばらく二人共微動だにせず、落ち着いた僕がようやく口を開いた。

「どうしたの？」

僕の声で、ようやく奈緒も動き出す。

「朝ごはん余分に作っちゃったんだけど、食べる？」

奈緒が余分に作ってくれた朝ごはんが食卓に並んだ。ごはんは味噌汁、焼き魚に玉子焼き、シーチキンサラダ。

「あーっ！」

「なに、どうしたの？」

思わず大声を出してしまい、奈緒が体をのけ反らせて驚いた。

「だって」

シーチキンをご飯にかけて食べようと思っていたのに、と言おうと思っただけで止めた。理由はよく分からないけどせっかく奈緒が作ってくれた朝ごはんにケチをつけるのは野暮なことだ。

出かかっていた言葉をぐっと飲み込み、席に付く。

「なんでもない、食べよ」

奈緒も腑に落ちないような表情で、僕と向い合わせの席に付いた。二人でご飯を手べるのは珍しくないのだが、居間で二人つきりで

ご飯を食べると、なんだか新婚さんみたいな感じがしてとてもぎくしゃくしてしまう。恥ずかしくて、思わず顔が下がってしまう。一方の奈緒はといえば、全然普通に食べている。まあ、奈緒みたいな美人が僕なんかでは緊張するはずがないのだが。

「なに、おいしくないの？」

「いや、おいしいよ！ たぶん」

万能超人が作る朝ごはんは間違いなくおいしいはずだけど、緊張で味がよく分からない。それで思わず「たぶん」を付けてしまった。

どうやらそれが奈緒のプライドを傷付けてしまったようだ。奈緒の鋭い眼光が僕に突き刺さると同時に、手が動くのが見えた。殴られると感じ、僕がとっさに目をつむる。

しかし、いつまでたっても殴られない。恐る恐る目を開けると、シーチキンサラダを掴んだ箸が見えた。

「じゃあ、これも食べてみなさいよ」

「えっ？」

奈緒の箸が掴んだシーチキンサラダが目の前にある。そして、食べると言っている。僕に取り皿はない。

……このまま食べると？

もしかして”あーん”をしてきているのかっ!?

でも付き合ってるわけでもないのに、まさかそんなことがあるわけ……。でもこれは、そうと考えられなくもないような……。考えていたらだんだんと、体が熱くなってくる。

「ほら、早く食べてよ。腕が疲れるじゃない」

シーチキンサラダがさらに僕に近づく。思い切って、口を開けた。「い、いただきます」

目の前のターゲットをロックオン。そして、すぐさま目標を頂きにかかる。

だが、手応えはなく、上下の歯がぶつかり合うだけだった。その時ターゲットは、すでに奈緒が美味しく頂いていた。

「私の料理なんて不味くて食べられないのね。もういいわよ。あんななんかにご飯作ってあげないんだから」

「もしかしたらサラダを食べながら、不機嫌そうにそっぽを向いてしまう。」

「違うよ。凄く美味しいんだけど、緊張して味が分からなくて……」  
僕がそう言うと、相変わらずぶすつとしたまま口を開く。

「なんで幼なじみの私で緊張するのよっ」

「だって……」

「だって、奈緒は凄く美人で、僕なんかと一緒にご飯を食べれるよ  
うな人じゃないから。と思ったけど、美人とか恥ずかしくて言えな  
いし、やたら卑屈ばいことを言うとな緒に怒られるので、再びぐつ  
と飲み込んだ。」

「ていうか、なんで奈緒が僕の家にいるのさ？」

「……部屋に忘れ物しちゃって。でも一人で行く友達がいな  
いみたいで嫌やだから、あなたに着いて来てもらおうと思って」

奈緒が玉子焼きに箸を伸ばす。綺麗に巻かれた長方形の玉子焼き  
は、売り物に全く負けていない。勉強や運動だけでなく料理までも  
できるなんて、神様に贖罪しすぎだと文句をつけてやりたくなる。

そして普通に考えると、そんな美人で天才な奈緒が平凡な僕を誘  
うわけがない。つまりは、この誘いは昨日の遊園地の時みたいに罠  
である。そう、奈緒が僕を虐めて楽しむために誘っているのだ。

「あの、僕はこれから」

突然、ぱんつと机が強く叩かれる。思わず身がすくんだ。

「私、あなたのために朝ごはん作っただけだ」

## 第2話つづき

『あなたのために朝ごはん作ったんだけど』　そんなことわかれたらもう、頷くしかないじゃないか。

あなたのためにという言葉に喜んでいるわけじゃなく……ただ単に奈緒が恐いから。断ったら後でなにされるか分からないし。僕は急いで寝間着を着替え、家を出た。

意志の弱い自分に悲しみながら、奈緒の後ろに着いて学校へ向かって歩いていく。奈緒の宝石のように煌めく金の後ろ髪を見ながら歩くのにはもう馴れた。……僕には亭主関白は難しいかもしれない。

「はあ」

と、思わずため息が出た。

前を歩いていた奈緒が、突然振り返る。

「なんでそんなに嫌やそうなのよ」

「……ちよつと自分が嫌やになってね」

奈緒が呆れたように「はあ？」と首を傾げる。奈緒は自己嫌悪なんかすることないんだろうな。欠陥だらけの僕とは違って完璧人間だし。

「いいよねえ。奈緒は悩みなんかないでしょ」

卑屈っぽいのが、心の底から出た言葉だ。

「僕なんかとは住む世界が違う、完璧人間だもん」

言いながら、怒られるなあと後悔する。すと思った通りに、強く頭を叩かれた。ぱあんと乾いた音が響く。

「なによ、私だって悩んでるのよっ！……あ、あんたが、そんなんだから」

尻つぼみに声が小さくなって、もごもごと何を言っているか分からない。怒っているはずなのに、なぜか恥ずかしそうに頬を赤く染めている。気弱な奈緒も可愛いとか僕は見とれてしまうのだが……どうしたんだろ？

なんで奈緒が恥ずかしがっているんだろと考えていたら、ふと奈緒と目が合う。

するとまた、殴られた。

「いたいよ！　なんで殴るのさ」

「私みたいな美少女に殴られるんだから、光栄に思いなさいよっ」  
めちやくちやなことを言って、早足で歩き始めた。僕は慌てて後ろをついて行く。

やっぱり女子は不思議な生き物だ。繊細かつ複雑に絡み合った女心は、僕なんかでは一生解読することが出来ないだろうな。特に奈緒の場合は、十七回生まれ変わっても無理そうだな。なんて、もてない男子がぼやいてみた。

学校までは徒歩で二十分程度。

会話はあれ以降一切なかった。気まずい空気漂う中、僕はずっと奈緒のぴんと伸びた背中を見ながら歩いている。

未だ慣れることのない美人と一緒に歩いているという緊張感と重い雰囲気押しつぶされそうになっていたとき、ようやく目的地の学校が見える。僕は思わず小さくガッツポーズをした。

校門を過ぎると、サッカー部や野球部の男子たちの視線が奈緒に集まり始める。いつもながら凄くお出迎えだ。たちまち僕は居心地が悪くなり、少し距離をとる。

「そっいえばさ、何忘れたの？」

奈緒は振り返ることなく、

「なんでもいいでしょ。早く行くわよ」

と、怒ったように言う。

「行っつてどこに？　教室？」

「部室よ」

部室……。はたしてその呼び方は正しいのだろうか。

一応、奈緒と僕は同じ部活に入っている。名前はアマチュア無線部。部員は五人。そのうち三人が入部以来ずっと幽霊部員だ。

だから、実質的に部員は奈緒と僕だけ。二人ともアマチュア無線に興味があるわけではなく、放課後に二人でのんびりするのが主な活動内容だ。

そんな僕らが活動している場所が、東館一階の左隅にこっそりある美術室跡地。ここは正式な部室ではなく、無許可で使わせてもらっている。なので部屋の中には以前使っていたと思われる教材でごった返しており、結構狭かったりもする。

「ほら、早く着いてきなさい。置いていくわよ」

奈緒はさっさと歩いていってしまった。僕は「ごめんね」と謝りながら、小走りで奈緒について行く。こうやって、謝ってばかりいるから虐められるんだろっなあ……。また、亭主関白が遠ざかった気がする。

再び自虐的になっていたとき、奈緒のものではない穏やかで優しい感じのする声が耳に入った。

「こんにちは」

聞き覚えのある声に僕は思わず立ち止まる。声の主が誰かはすぐに分かり、緊張の津波が押し寄せてきた。足が小刻みに震え始め、顔が熱くなる。

「あれ、塩崎さんじゃない」

奈緒も気付き、その場に止まり振り返る。

僕もゆっくりと、声の方を向いた。

「こ、ここに、こんにちは」

柔らかそうな唇がにこつと笑う。彼女は塩崎 愛美さん。

艶やかな黒髪を後ろで結わい、揉み上げは桃色の頬を伝って肩へとこぼれおちる。ぱっちり開いた大きな目と幼さの残る顔立ちからは、穏やかな雰囲気を感じられる。学校の制服に身を包み、肩からは大きめのエナメルバックがかけられている。

彼女は僕と同じクラスで席も近くて、僕が女子（奈緒以外の）とまともに話せないのも知っている。見た目どうりとても優しい、誰からも好かれるいい人なんだけど……。僕だけには少し意地悪だ。

「今日は部活？」

奈緒なんかには目もくれず、僕の方をがつつり見ている。僕は即座に顔を逸らした。

「あの、奈緒が忘れ物とりに……」

「へー。私は今部活が終わったとこだよ」

僕は奈緒の方を向き、必死にSOSの視線を送る。僕が女子と喋るときはだいたい奈緒が通訳になってくれるのだ。

しかし今日は僕のSOS信号を受け取ってくれない。それどころかそっぽを向いて、全く僕の方を見ようとはしなかった。

「……女の子の話を無視するのかな？」

「あつ！ いやっ！ そういうわけじゃあー！」

僕は慌てて首を振る。すると、塩崎さんはぶうと頬を膨らませ、

「ふーん。いいわよもう。私なんか眼中になしだもんね」

とこちらもそっぽを向いてしまう。

「え、あの、眼中にないっ？ いや、僕は塩崎さんがあれだよ、入ってます、目にっ！」

頭が茹で上がり、おろおろと意味の分からないにならない言葉が発する僕。奈緒からの支援もなく、僕はひたすらに地獄を見続けている。

僕を苦しませる地獄の女神は詰め寄ると、そつと呟くように言った。

「……私のこと嫌い？」

うつすらと涙を浮かべた、子犬のような弱々しい甘えた瞳が僕を見つめていた。

息が詰まる。こんなことされたら僕じゃなくても、世の中の男性の八割は呼吸することさえ忘れて見入ってしまうだろう。思わず、ぎゅっと抱きしめたくなった。

そんなとき、現実の世界に無理矢理引き戻こまれる。腕が強く掴まれたのだ。

「行くわよっ！」

「な、奈緒っ？」

腕を掴んだのは奈緒。そのまま投げ飛ばされるのではないかというぐらい、強く引つ張られた。

「私たち急いでるから、じゃあね塩崎さんっ！」

吐き捨てるように言い、早足でその場を離れる。後ろでは「あとでメールするから、答え聞かせてね」と塩崎さんがいじめっ子の笑みを浮かべて言っていた。

遠ざかっていく塩崎さんを見て、僕はほっと安堵の息を吐き出す。奈緒が止めてくれなかったら、抱きしめる 変態扱いされる クラスのみんなにばらされる みんなからも変態扱いされる 登校拒否、という悪魔のコンボが決まるどころだった。いつもながら、卑劣な罠を仕掛けてくるな塩崎さんは。

「あの、奈緒。ありが」

奈緒の声が僕の言葉を遮った。

「ごめんなさいね。せっかく、私と違って可愛い塩崎さんといひ雰囲気になれたのに」

「えっ」

依然掴まれたままの腕を引かれて、さらに歩調が速くなる。奈緒は変わることなく前を向き表情を窺い知ることとはできないが、怒っているわけではないようだ。なんとなくだが、そう感じた。

再び二人の間に沈黙が流れる。

長い付き合いなのに今奈緒がどんな気持ちなのか、どんな言葉を待っているのかも、どうして欲しいのかも分からない。女心は複雑とともに繊細だから下手に声をかけたって、さらに不機嫌になるだけ。

僕は口を開くことなく、奈緒に引つ張られていた。

下駄箱でスリッパに履き替え、そのまま旧美術室 部室へと連れて行かれる。

文化系の部活の人達が校内にはいて、出会う男子達は奈緒に見と

れ、その奥から女子達が奈緒に嫉妬に満ちた目を向けていた。こういう光景を見ると、奈緒の凄さを思い知る。

これは僕の勝手な考えだが、女子達は自分よりも下または中の下の女性を「可愛い」と言う。しかし奈緒みたいに整い過ぎていると、逆に嫉まれる。しかも、文武両道なら尚更だ。

現に奈緒に可愛いとか言っているのは男子のみで、女子達は「遊んでそう」とか「整形っぽくない」とか悪口しか言わない。僕が女子と話するとき緊張するのも、こういう腹黒さを奈緒に教えてもらったからでもある。

僕は嫉妬されるのはあまり好きではないので、本当に普通でよかったと思う。まあ、奈緒の傍にいて男子達からは嫉妬されているが……。

「奈緒も大変だなあ……」

「んっ？」

僕が思わずぼそつと言った眩きを、奈緒は聞き逃さなかったようだ。訝しそうな表情で僕を見る。

「なんか言った？」

「いや」

「なんか言ったっ？」

「……奈緒さんも大変そうだなと思っただけです」

強くなってきた奈緒の口調に僕の心はすぐ折れた。

「ふーん。よくわかんないけど、心配してくれるんなら」

理解できないような様子だったが、なにを思ったかさっきの塩崎さんのように僕の懐に入る。

「な、奈緒っ？」

塩崎さんのときよりももっと体を寄せてくるので僕は身を引くが、奈緒が僕の腰に手を回すので逃げられない。心臓がF1のエンジンのように激しくうなりを上げた。

妖艶な甘い香がする。スリムで引き締まっているけど、女の子の柔らかさをもつ奈緒の体の感触が伝わってくる。血が流れすぎて頭

がぼーっとした。もう倒れてしまいそうだ。

僕の顔も真っ赤だろうけど、見上げる端正な顔立ちにも赤みが差している。

魅惑的な唇が僅かに開いた。

「……ありがとう」

可愛い。もう、それしか考えられなかった。下手な言葉で形容したところでこの愛おしさは伝わらない。本当に、可愛すぎだよ奈緒。なんとなく信じられなくなる。こんな可愛い女の子が僕を相手にしてくれているなんて。僕みたいな平平凡凡に、世界中のどんな人だって敵わない表情を見せてくれるなんて。……ああ、きつと夢なんだ。朝起きてガツカリするタイプの夢なんだ。

腰に回されていた手が離れる。僕が後ろによるめき、抱き着いていた奈緒との間に距離ができた。

「どう、塩崎さんのより破壊力あったでしょ？」

ふふんと鼻で笑い、してやったりというように奈緒が言う。

僕はもう何も考えられず、呆然と立ち尽くしていた。

「なによ、答えなさいよ……」

奈緒の頬にも大分赤みが残っている。それを見るとよけいギクシヤクしてしまう。

もう、ただ頷くことしかできなかった。

「私はね、あんな腹黒い女より」

「はやく部屋行こうっ」

よく分からなくなった僕が発した声が、奈緒の話しに被る。奈緒が喋るのを止めてしまった。

「え、なに奈緒？」

しばしの沈黙ののち、

「なんでもないわよっ。もういい、帰るんだから」

普段の奈緒に戻った。

「え。でも、忘れ物は？」

「そんなの最初からないからいいの」

悪びれることもなく、さらりと衝撃の発言をした。

「……じゃあ、なんで学校まで来たのさ」

奈緒が再び近付く。

「ま、またさっきのやれば許してくれる？」

「ええっ？」

もう一度されたらとても嬉しいけど、体が持たないよ。次は自分の熱に耐え切れず、溶けてしまいそうだ。

「冗談よ。……でも」奈緒が悪戯っぽい笑顔を浮かべる。「あんたがやって欲しいって言うなら、いつでもしてあげるからね」

歩き出す奈緒は相変わらず速く、やっぱり僕は揺らめく後ろ髪を見ながら家路についた。

### 第3話

朝は眠い。

冷たい水で顔を洗おうが、無理してコーヒーを飲んだって眠いものは眠い。まぶたが殺人的に重くて、布団が法律で規制されるのではないかと思うほど気持ちいい。僕の体が睡眠を猛烈に求めている。そんな朝になぜか僕は起きなくてはいけない。

神様は残酷だと思う。僕にこんな取り柄のない詰まらない体を与えておきながら、奈緒のような完璧人間と同じように朝起きなければいけない。他の面で劣っているのだから、少しぐらいハンデをくれてもいいのに。

なんて神様に対して愚痴ったところでどうにもなるわけではなく、僕は布団を蹴り飛ばし、学校へ行くために起きるのであった。

寝起きでふらつく足で階段を降り、リビングへ行くと、

「おはよー」

一瞬、昨日のエプロン姿の奈緒が思い浮かびどきりとしていた。だがというか、勿論というかりビングにいたのはただの母親。僕はなんとも言えない気分で返事をする。

「おはよー」

なぜだか母さんはいたずらっぽい笑顔を浮かべた。

「奈緒ちゃんじゃなくてガツカリ？」

「……なんでさ」

「べつにいいー」

母さんの視線が気になりつつも僕は席に着く。

テーブルの上には、目玉焼きとハムとチーズをトーストで挟んだ目玉焼きサンドとお茶が乗っていた。お馴染みのメニューなのだが、昨日とはえらい違いだ。

「悪かったわね、奈緒ちゃんよりも貧相で」

「なんにも言っていないんだけど」

「あらそう」

そう言って僕の向かいの席に腰を下ろす。すると、肘を付き、放課中のクラスの女子のような嬉しそうな表情で僕を見てくる。いやな予感がするな。

僕は上下のトーストをぎゅっと押さえ、中身が動かないようにして目玉焼きサンドを頬張る。

「ねえ」

きた。どうせろくでもない話しを喋りだすのだろう。僕は無視してお茶を飲む。

「奈緒ちゃんとキスした？」

思わず飲んでいたお茶を吐き出す……なんてベタなりアクションはしない。これぐらいもう慣れっこだ。この母親、奈緒と遊びに行くと言うたびに「隙があったら押し倒せ」だの「強引に抱き寄せてキスしな」等々、親とは思えないような過激な発言を連発してくる。諦めつつも、僕は一応否定をする。

「なんで僕が奈緒とキスして、そんなことするのかさ」

「だって付き合ってるんでしょ？」

「無理だから」

母さんがはんと鼻で笑った。本当にこういう話しをしているときの母さんは生き生きしている。普段の家事もこれくらい頑張ればいいのに。

「あんだ、女心まったく分かってないわね」

僕は返事はせずに食事を続ける。母さんは一人でタバコを吸う真似をしながら、独自の恋愛観について語り始めた。

「女ってというのはね見た目で判断しないの。大事なのは行動よ。女は男が行動に出てくれるのを待ってるんだから。女は告白とか大事な部分は受け身なんだから」

「でも僕には無理」

僕のか細い呟きが母さんのジェット機のエンジン音のような大きな声に掻き消される。

「なわけないでしょ。押し倒してみなさい。抵抗しないから。奈緒ちゃんがあたと遊んだり朝ごはん作ってくれたりするのはね、押し倒してーってカマかけてるんだから。好きだって言って押し倒しなさい。強引に、情熱的にね」

押し倒せ、押し倒せ言われていい加減恥ずかしくなってきたしまった。母親のくせにあまり健全な男子を刺激するようなことは言わないで欲しい。奈緒を押し倒すなんて、そんなこと……。

「お、その気になってきた？」

「着替えて来ますっ」

お茶を一気に飲んで、僕は着替えに行った。

あんな母さん、もうヤダ。

卑猥な母親のいる家を出て、今日も奈緒との待ち合わせ場所へ行く。

「おはよう」

奈緒は僕が来たことを確認すると早めに歩き出す。僕は小走りです奈緒の隣に行った。

やっぱり奈緒は今日も変わらず輝いている。奈緒の金髪がどうこうという話ではなく、全体的に眩しいオーラが出ている。目の覚めるような美人とは言いが、まさに奈緒がそうだ。毎朝目覚めるときに奈緒が居ればいいのに。

なんて思っ、すぐに首を振る。

母さんの言葉 「押し倒せ」が蘇ってきてしまったのだ。

「ど、どうしたの？」

僕の狂ったような行動に奈緒が引いてしまったようだ。僕は「あはは、なんでもない」と笑ってごまかそうとしたのだが、奈緒が気付いてしまったようだ。

「どうしたの？」

奈緒の視線が突き刺さる。正直奈緒に隠し事をできるとは思っていない。悪魔じみた鋭い勘に、神懸かった頭脳。どんな詐欺士でも

奈緒に嘘をつき通すのは無理だろう。

僕は観念して話すことにした。

「母さんがね、その、あのね……」

奈緒が怪訝そうに首を傾げているのが分かった。

白状する、白状するつもりなのだが「母さんに、奈緒を押し倒せ  
つて言われたら意識しちゃってー、えへへ」みたいな変態発言でき  
るわけがない。なのに

「私に隠し事するのね。幼なじみなのに、朝ごはんも作ってあげた  
のに」

よよよと泣きまねをしている奈緒を見て、僕はぞくりと本能的に  
身の危険を感じた。

「……母さんが過激な発言したんです。それでなんか、つい」

できるだけオブラートに包んで言ったのだが、奈緒は頬を朱く染  
めた。奈緒は家の母さんをよく知っているので、どんなことを言っ  
たのかピンときたのだろう。

「なるほどね、おばさんがね」

オブラートに包んだ中身が伝わったかと思うと、僕もすごく恥ず  
かしくなってきた。ほてる顔を上下に振って、なんとか冷まそうと  
する。

すると突然、腰を叩かれた。奈緒はふうと息を吐き、どこか冷め  
た目で僕を見る。

「言っとくけどね、私、あんたのことなんか嫌いよ」

「知ってるよ」

それぐらい心の底から理解している。なにせ僕と奈緒は、ビー玉  
とアンドロメダ星雲くらいの差がある。憧れはするけど、好きにな  
るなんて無謀なことはいらないから「嫌い」と言われてもダメージゼ  
ロだ。

僕に悪口を言っておきながら、なぜか奈緒が不機嫌そうな表情に  
なっていた。

「なんかムカつくわね」

「え？」

「私に言われたんだから、もつと悲しむとか泣くとかしなさいよ」  
また奈緒が理不尽なことを言っている。だけど僕としては

「奈緒に言われたから、なんともないんだよ」

「なっ……」

しまった。奈緒の『美少女』のプライドに傷をつけてしまった。

最近、立ち技最強のムエタイに凝り始めたようだし、膝とか肘で殴られたら死にかねない。僕はとっさに身構えた。

「……」

「いたたたたた」

蹴りや拳はこないで、手の甲をつねられた。これはこれで痛い、しかも断続的に。

やっと離してくれたときには、つねられたところが真っ赤になっていた。

「痛いじゃん、奈緒」

「あらら。塩崎さんにでもなでなでしてもらえば」

「なんで塩崎さんが出てくるのさ」

「じゃあ、私の方がいい？」

激しい痛みに襲われという手を、奈緒が優しく掴んだ。

「えっと、あ、その」

「まあ、嫌いだからしてあげないけどね」

赤くなつた部分を出して乱暴に僕の手を投げ捨てた。今日は朝っぱらから運の悪いことばかりだな。自然と深い溜息が出た。

「じゃあ私がしてあげる」

「……」

聞き覚えのある悪魔の声が聞こえてきた。本当に今日はどんだけついてないんだろ。下手したらトラックにでも轢かれてしまいうだ。

振り返ると、麗しの悪魔さま　塩崎さんが立っていた。家の方向違うのになのになんでここにいるんだろ。

塩崎さんは魅惑的な微笑みを浮かべ、僕に寄り添う。僕は美少女二人に挟まれる形になってしまった。ついてない……。

「私は好きだからね、キミのこと」

百パーセント嘘だろうが、初めて女性に『好き』と言われて、嫌な気分ではなかった。むしろこのままあの世に導かれてしまいたいような気分だ。

「手痛いんですよ。私が学校に着くまで握っててあげる」

「はあっ？」

声を上げたのは奈緒だった。僕はとりあえず、奈緒に伝言を頼む。せめて今日は伝言くらい拒否しないでほしい。僕は心の底からそう祈った。

祈りが通じたのか奈緒は頷き、塩崎さんに向かって言う。

「僕は奈緒をお願いするから別にいい。それよりもなんているの？  
だって」

前半全くの嘘じゃん、と、塩崎さんが隣にいる緊張で声にならない叫びが僕の脳内にこだまする。

「あはは。奈緒ちゃんがいいだなんて勇氣あるね。こんな美人さんはよほどカツコイイ人じゃないと手繋いでもらえないよー」

突然、ピリピリした空気になってきた。ピリピリした気を発しているのは二人の美女。間に挟まれた僕はそつとう居心地が悪い。両隣の様子を見ると、二人共互いを見ることがなく真っ直ぐ前を見ていた。

「別に、そうでもないわよ私は」

「またまたー。噂の初彼は相当のイケメンじゃない」

「なんのことよ、噂の初彼って」

「隠したって無駄よ、聞いたんだからね私。D組の夏木君、学校一のイケメンに告白されて付き合ってるんですよ」

「噂よ、そんなもの。ていうかなんでここにいるのよ」

「ちよつと郵便局に用があったの」

「なるほどね」

「そんなことより夏木君と付き合っていないって言うなら、今、好きな人とか彼氏とかいるの？」

すると流れるようなトゲトゲしい会話が止まる。そのとき僕は足を緩め、二人の会話をやや後方で眺めていた。

「……いないわよ、好きな人も彼氏も」

奈緒の怒ったような声が聞こえる。僕はもう少しゆっくり歩くことにした。

激しく言い合うわけではなく、普段の会話のように話しているのだがとても怖い。奈緒と塩崎さんってこんなに仲が悪かったんだ。というよりも、思い返せば奈緒と話す塩崎さんはいつも尖っていた気がする。塩崎さんも奈緒の美貌に嫉妬する口なのだろうか。そうは見えなかったのに。

「ちなみに私は好きな人いるけどね、すぐ近くに。さっきも告白しちゃったし」

「ふーん。相手も塩崎さんのこと好きみたいだからよかったじゃない」

「じゃあいつ押し倒されてもいいようにしておかないとね」

『押し倒す』……。

僕はうなだれながら、美少女達の後ろを歩いて学校へと行った。

### 第3話つづき

学校に着くと上履きに履き替え、僕は1 Cの教室へ向う。前方には相変わらず、美しい少女二人が歩いていた。神様の悪戯で、奈緒と塩崎さんと僕は同じクラスなのだ。

ああ心休まる暇さえないのか、とクラス変え直後は落ち込んだけど、今はありがたいことに奈緒との席が遠い。前回の席替えて僕は教壇から見て右後ろの席になり、奈緒は左前。対極に位置しているのだ。だから僕は、奈緒から開放されるとひそかに喜んでいた。ほんの、一瞬だけ……。

「今日の一限目って国語だっけ？」

机とにらめっこしていた僕を、隣の席の塩崎さんが覗き込むように首を傾げる。可愛すぎる不意打ちに、僕はすぐに視線を外した。

「う、うん」

「じゃあ、二限目は数学？」

「うん」

「じゃあじゃあ、その次は？」

ちらつと見ると、塩崎さんの顔がさらに近づいて来た。

「……社会です」

「じゃあじゃあじゃあ」

塩崎さんが席を立て、僕の机の前にしゃがみ込んでいる。塩崎さんの髪の毛の甘い匂いが鼻をくすぐった。匂いでさらに塩崎さんを意識してしまうので、鼻を抑えた。

猫のような悪戯っぽい瞳に人懐っこい笑顔を浮かべ、僕を見つめている。視線の暴力とは言うが、まさにこれがそうだ。可愛いけど、暴力だ。

「六限目は？」

「保健」

「えっちー」

「えっ？」

塩崎さんがにやつと笑った。そして僕があたふたしているのを面白そうに眺めている。席替えしてからずっと、こんな感じなのだ。僕は女子が苦手だし、奈緒よりも夕チが悪い。

「止めといてやれよ」

救いの手。それはちょうど今来た、友達の高彦の声だった。

「たかひこ」

我ながら、とても情けない声が出る。

高彦は鞆を机に置き、呆れたようにため息を吐いた。ご自慢の茶色い髪は、今日もきつちりセットされている。

「ほら、もうコレも死にそうだからさ、勘弁してやろうね塩崎」

コレとか言われてちょっと心外だけど、高彦様ありがとう。そんな意味を込めたつもりで高彦に顔を向ける。高彦は呆れたように頭を掻いた。

たけど、塩崎さんの目は動かない。

「あと五分だけだから」

「駄目だよ。近藤に呼んでこいって言われてるんだから」

苗字で言われるとピンと来ないが、近藤とは奈緒のことだ。高彦は塩崎さんをそう牽制しながら、僕の首根っこを掴む。テニス部で毎日鍛えているだけあって、僕は簡単に立たされてしまった。

「そういうことだから、行くわ」

塩崎さんにじとつとした目で睨まれながら、僕は高彦に引きずられていく。

「いつもありがとう、高彦」

「いえ、毎度ご利用ありがとうございます」

皮肉気味に言われながら、そのまま廊下に出る。奈緒のところに行くというのは言い訳で、実際に行くことはない。今回はたまたま奈緒がダシになっていたけど、先生とか友達とかいるんな人を使っている。

「しかし、お前もホントいいご身分だよな」

そして、適当に廊下を歩きながら、朝のSTまでの時間を潰す。これもいつものお決まりだ。

「……そうでもないよ」

僕がややうなだれながら言う。すると、高彦がすごい勢いで言い返してきた。

「女子が苦手とはいえ、学校一の美人と学校一のモテ女に言い寄られて『そうでもない』わけないだろう」

この場合、学校一の美人が奈緒でモテ女が塩崎さんだ。高彦は声を荒げ、興奮した様子で続ける。

「だいたい俺なんか、近藤に口を聞いてもらえたことさえないんだぞ。なのにお前は学校一の美人と毎日一緒に登校したり楽しくお喋りしたり」

「悪戯されたり、サンドバックにされたりね……」

僕がそつと付け加えると、高彦が怪訝そうな顔付きになった。

「でも、虐められるとしても構ってくれるんだし、それは脈ありってことじゃなか。だいたいお前、女子でも近藤は大丈夫なんだろ。

もう付き合っちゃえばいいじゃんか」

「へ？」

高彦のあまりにも現実味に欠けた言葉に、僕は呆然とした。奈緒と僕が付き合うなんて、無理に決まっている。無限大パーセント無理だ。母親といい高彦といい、なんでそんな分かりきったことを言うのだろうか。

「そうすればさ、塩崎だつてそんなに話しかけてこないって。俺も楽になるし、名案じゃね？」

高彦はまるで難しいクイズの答えを思い付いたような表情で、人差し指を向けてきた。僕はすぐさまその手を払う。

「名案じゃねえ」

「なんでだよ。お前ならいけるって」

「いや、無理でしょ。一般常識的に」

「……お前、さてはホモか？」

高彦が僕との距離を取った。

「やめろよ。俺、お前とはただの友達だからな。突いたり突かれたりは絶対無理だからな」

「しないからっ！」

ケラケラと高彦が笑う。その後も、下ネタを交えた談笑をしながら時間を潰した。

しばらくして、朝のチャイムが鳴り僕はあの地獄のような席に戻る。先生はまだ来ていないようで、席に戻ると塩崎さんが数人の女子と雑談していた。なので僕は気付かれないよう顔を伏せ、出来る限り存在感を消し先生が来るのを待つことにする。

「お、私の彼氏が帰ってきた」

顔を伏せながらも女子達の視線が自分に向くのが分かった。自然と冷や汗が出る。

「二人つて付き合ってたの？」

「近藤さんとじゃなかったの？」

「ああ、そういえば近藤さんは夏木くんだもんね」

とわあわあきゃあきゃあ騒ぎだした。ここで「違うからっ」と一言否定出来ればいいのだが、残念ながら緊張で口が開きそうにない。こんな状況が高彦は羨ましいのだろうか。

高彦様の助けを待っていると、先生が来たようで女子達の声が止んだ。

朝のSTが始まり、先生が出欠の確認やら連絡やらをする。担任の先生は結構めんどくさがりなので、朝のSTはいつものように三分かからずに終わった。

「ねえ」

席を立とうとしたら、塩崎さんに声をかけられた。嫌な予感がバリバリする。

「な、なに？」

「国語の教科書忘れちゃったみたいなの。一限目見せてくれない？」  
見せるということは、机を引っ付けて一緒に見るとのこと……、

想像しただけで顔が熱くなった。だいたいそんなことしたら女子達の恋愛話に油を挿すだけだ。

分かっているんだけど、塩崎さんの顔を見るとどうにも……断れない。

「嫌や？」

僕は、国語の教科書を差し出した。

授業中も、となりの方からの攻撃は止まなかった。

最近の塩崎さんは、奈緒よりも酷い。相手は僕が女子を苦手だつて知っているのに、すつごく近づいてくる。しかもそれで「好き」とか「押し倒して」とか、破壊力抜群の表情を浮かべて言ってくる。そんなこと言われたら今まで虐められたことも、まあいいかなあつて少し許せてしまう。そこも塩崎さんの計算の内なのだろうが……。

「なあ、ちよつとトイレいかない？」

お昼休み、給食を食べ終わってぐったりしていると高彦に声をかけられた。

「いいけど」

塩崎さんはちよつど友達と話していて、こちらをあまり見ていない。僕は立ち上がり、高彦に着いて行く。

トイレへ行くと言ってたわりに、トイレとは真逆の方向に廊下を歩いていった。僕が不思議に思っただけで尋ねようとしたとき、高彦がぼつりと言った。

「なあ、朝さ、近藤と付き合えとか言ってたじゃん？」

「え、うん」

前を向いていた高彦の視線が僕にくる。

「ずっと考えてたんだけど、やっぱりあれ名案だと思っただ。だからさ、告白しよぜ。近藤に」

僕が……告白？

「はあっ？」

思わず声を上げた。突然何を言っているのだろうか。呆然とする

僕を他所に、高彦は真面目な顔付きでいる。

「一週間。一週間、お前に時間をやるから心の準備と告白の言葉考えておけ」

肩をがしつと掴まれた。目が本気だ。

「一週間後、俺が近藤を呼び出してやる。だから、告白しろ」

高彦の熱気がムンムン伝わってくる。テニスでもこういう時も、高彦は遊び人っぽい見た目とは違い、かなり熱い男なのだ。だからこうなると、誰にも止められなくなってしまふ。

「でもさ」

「でもないんだ、俺のためにも頑張れ。大丈夫、近藤もお前のこと好きだって」

奈緒が僕を好き。どうやったらそんな考えにいたるのだろうか。だが、今の高彦に言ったところで無駄だろう。

「いや、奈緒は今夏木君と付き合ってるって噂だよ」

適当に思い付いた言い訳を言ってみる。

「そんなの噂だろ。なんなら聞いてみる。それで本当に付き合ってたら、諦める」

「わ、分かった」

「今から聞いてみる。メールか電話でな」

高彦の目が鋭く光る。逃げることは出来ないようだ。自分の周りには面倒臭い友達しかいないな、と少し落ち込みながら奈緒にメールを打つ。

『夏木君と付き合ってるって本当？』

こんなメールを送るなんて、なんだか恥ずかしかった。打った後、一応高彦にも内容を確認させ、返事を待った。

奈緒から返事はすぐに来た。内容はたった一言だけ、『馬鹿』と書いてあっただけだった。しかし、その一言からは奈緒の怒りががらん伝わってくる。血の気がさーっと引くのが分かった。

高彦が携帯を覗き込む。メールの内容を見て、高彦は手をぼんと僕の肩に置いた。

「よし、そういうことだ。一週間後、頑張れよ」

「え？」

馬鹿っただけで、付き合っていないとは言っていないのに。ちよっと理不尽なので、僕もここで反撃に出る。

「ちよっと待って。僕だけじゃ不公平だから、高彦も好きな人に告白してよっ」

「はっ？」

「ほら、女子テニス部の部長さんとかにさ」

張り手が飛んできた。高彦は入学してからずっと、女子テニス部の先輩に恋してるのだ。相手は短い髪がよく似合うスポーツ少女で、結構男子からは人気がある。高彦からはよく相談されたり、手が触っちゃった話とかを聞かされているのだ。

「それはいいんだ。まだメールアドレスも聞けてないし」

高彦の顔が少し赤らんでいた。

「でも好きなんですよ？」

僕がにやけながらそう言う。すると高彦が冷ややかな表情で呟いた。

「うるさい。もう女子に絡まれても助けてやらないからな」

「すみません」

気付くと、体が勝手に謝った。

### 3話つづき&amp;p.4話

そんな最終兵器を出されたら、正直手も足も出ない。僕と高彦は無言で教室に戻った。

教室に戻ると、塩崎さんは友達と教室の隅の方で話していた。僕は安心して席に座り、奈緒の方を見る。

右列の一番前の席で、一人静かに本を読んでいた。前に覗いたところがあるのだが、難しくて何がなんだかさっぱり分からないような本だった。たぶん今読んでるのも難しい本なんだろう。

……僕が彼女に告白するのか。

自然と、ため息が出た。

無理だね。

そう、家が近い幼なじみというだけで奇跡なんだ。一生分の運を使い果たしていると言っても過言じゃない。それ以上の、好いた好かれたの仲になるほどの運気はもう残っていないんだ。

とはいえ、高彦のことだ、告白はさせられるに違いない。面倒臭いことに、高彦は古きよき日本のお父さん方も驚くほどの頑固者なのだ。

告白か、と思う。

よく、仲間内の罰ゲームで『好きな人に告白』とかいう残酷かつメジャーなものがあつたけど、僕に告白する権利はあるのだろうか？

だって、好きな人に自分の想いを伝えることが、告白。

はたして、僕は奈緒に、『好き』だという恋愛感情を持っているのだろうか？

好きというのは、一緒にいてドキドキしたり、いつも相手のことを想っていたり、ずっと傍にいたいという気持ちだと（古い少女漫画のようだけど）僕は考えている。

確かに、奈緒と一緒にいればドキドキする。だけどそのドキドキという気持ちは、恋というよりは、百億円のダイヤを持たされて歩

いているような、ハラハラするような気持ちに似ている。

奈緒の傍には、正直に言えば、いたいと思う。だけどそれだって、奈緒が美人だから、かもしれない。美人じゃなかったら、そうは思わないのかな？

そんなかつこつけた、恥ずかしい自問自答を繰り返していると、ポケットで携帯が振動した。

見れば、奈緒からのメールだった。

『なに見てんの』

奈緒が眉間にしわをよせ、こちらを睨んでいる。僕は、真っ赤になつた顔を隠すために、机に伏せた。

塩崎さんの妨害を受けつつも、なんとか授業は終わる。僕は奈緒の後方という定位置につき、教室を出た。

部員が二人しかいないし、正式許可さえされていない部活（？）に行くためだ。

部室（？）の位置の関係上、僕らは下校する生徒達の流れに逆らつて廊下を進む。

「奈緒、はやいよ」

「あんたが遅いの」

ズバツと断言する美少女は、煌めく金髪を揺らし、僕の言葉など聞き入れる様子もなくさっさかと進む。

「どうせやることなんてとくにないんだから、ゆっくり行こうよ」

「やることなら、あるわよ」

「え、なに？」

「ローキックの練習」

「……ムエタイは危ないから止めて下さい」

「なに言ってるのよ、キックはローに始まりローに終わると言われるほど大切な技なのよ。練習しないわけないでしょうが！」

「ご、ごめん……って、なんで僕が怒られるのさ！ それならムエタイ教室かなんかに行つてよ！」

「じゃあ肘」

「肘は死ぬって!」

けたけたと笑う奈緒。僕はやはり変わらず、奈緒の後ろを歩く。歩くのが遅いからとか理由ではなく、さつきから普段以上に彼女を意識してしまつて、横に並べない。もうたぶん、顔はまともに見れなくなつていた。

告白。そのことが頭にあるだけで、奈緒がいままでよりもさらに輝いて見える、魔法の言葉だった。

「……なんか、今日のおんた変」

「えっ?」

声が、上擦つた。

奈緒が金の髪を宙に舞わせ振り返る。思わず、バツと視線を下に落とした。

「ずっとこつち見てたときといい、夏木君のこと聞いてきたことといい、もしかして、二人だけになったら押し倒してきたりしないでしょうね」

最後にふふんと嘲笑のような笑いを加える。

茶化しているんだから……、言い返さなきゃ……。

「な、なに赤くなつてるのよ!」

「……押し倒したりしないから」

「つっこみが遅いわよ!」スパアンと頭を叩かれた。「なんか、こちまで恥ずかしくなるじゃないっ」

奈緒は荒ぐ口調で続ける。

「ホントに、なんか、変よ、おんた」

「ご、ごめん」

奈緒の歩調が速くなる。

「なんか、まるで」小さく、呟いた。「私のこと好きみたいじゃない」

そう言った気がして、見ると、奈緒の耳が赤くなつていたような気もした。

僕は変みたいだ。

今日もいつもと変わらない。

朝起きるで、顔を洗って歯を磨いて、母さんの過激な恋愛思想を聞きながら朝ごはんを食べて、制服に着替えて、家を出る。

そして 奈緒と一緒に学校に行く。

「お、おはよう」

「おはよう」

朝からキリリと引き締まった、綺麗な奈緒の声。

いつものように、奈緒がそのまま歩き出す。

僕も、奈緒の朝日のように輝く金髪を見ながら後ろを歩く。

……はずだった。

「なに俯いてるのよ」

今、なぜか奈緒が僕の隣を歩いている。

ふんわりと香る甘い匂い。絵画から抜け出してきたような美しい

横顔。さらさらと揺れる金の髪。

それを今、僕は隣にして歩いている。

「き、今日は歩くの遅いんだね！」

声量がコントロール出来ず、やたら大きな声が出てしまった。

「昨日言ってたでしょ、歩くのがはやいって。私は優しいのよ」

「そっだ、ね」

本当は、死人に鞭状態だけど。

「でしょ。なんなら、て、手も繋ぐ？」

「そ、そんなんっ！」

「なに慌ててんのよ、冗談に決まってるでしょ」

奈緒が、顔を熱くした僕を見てけらけら笑う。

今日の奈緒は、塩崎さんより辛い。学校、すごい行きたくなくなつた。

「そつえば、今日、六時間目に数学の小テストあるわね」

「えっ」

「あ、忘れてた？」

「う、うん」

勉強、まったくしてなかった。僕は勉強しなくてもいい点数とれるような、どつかの天才さんとは違い、勉強してそこそこの点数をとるような人間なのに。

しかも、数学の小テストは点数が悪いと、たつぷり宿題を出される。

……帰ろつかない。ホントに。

「なんなら、私が教えてあげようか？ 六時間目だから、時間はあまるし。一人でやるよりは、天才の教えを受けたほうがいいと思うわよ」

「……」

天才型の人は教えるのがあまり上手くないと思うかもしれないけど、奈緒は違う。

教えるのも天才的で、お金を払わないといけないんじゃないかと思うほど上手い。学校の先生達よりも親切、丁寧でわかりやすい。だけど……。

悩んでいると、奈緒の顔が視界に割り込んだ。

「もしかして、私に気を使ってるの？」

「やっぱり、かわいい。恥ずかしいけど、目が離せなくなった。」

「いや、そんな……」湯だった頭に、山積みの宿題が過ぎる。「でも、やっぱり、その、お願いします」

「よろしい」

奈緒が強い笑みを浮かべた。

僕はその笑いの裏側を想像しながら、恐る恐る聞く。

「……お礼はなにをすれば？」

「どつちでもいいわよそんなの」  
まさかのお言葉。

今日は以外に、ツイているかもしれない。

お昼ご飯を食べ終わって、僕はノートを手にしてすぐに奈緒の席へと向かう。

席を立つとき、塩崎さんの妨害があったものの、そこは宿題をやりたくない一心でなんとか切り抜けた。以外にやれば出来るもんだ。  
「奈緒、その、お願いします」

またなにやら難しげな本を畳み、奈緒が顔を上げた。

「どこがわからないの？」

「えっと、ここの問題が……」

「……本当に、メール見た？」

呆れた顔で奈緒が言った。

一時間目の放課、奈緒は『天才の教えるテスト対策』という題名で僕にメールを送ってきた。内容は題名の通り、テスト対策。教科書の何ページ目の何行が大切とか、その補足説明とか、かなり詳しく丁寧に書いてくれていた。僕はそれを参考に、今までせこせこ勉強していたのだが、

「何回やっても答が合わなくて」

奈緒がノートを手にとり、問題と僕の解答を見る。

「……ここ式の途中で数値変わってるし、ここは足し算間違えてるわよ」

見てみると、本当だった。全く気付かなかった。

「あ、あははは」

苦し紛れで笑う僕を、目を細めて見る奈緒は言う。

「で、他にわからないところは？」

「あ、ここの問題も」

「勉強なら私が教えて上げたのに」

「え？」肩越しに、塩崎さんが見えた。「うわあっ！」

「なによ、失礼ね」

「う、ごめん」

塩崎さんが腕を組み、ぷうっと頬を膨らませた。

「いやよ、絶対許さないんだからね。許して欲しかったら、私に勉強教えさせて。私、退屈で死にそうだったんだから。遊びたいんだから」

「で、でも」

奈緒にヘルプを送る。

しかし、奈緒はこっちを見る気配さえなく、ただノートに視線を落としていた。

個人的には、塩崎さんの悪意漂う理由が恐くてしょうがないので、奈緒に教えてもらったほうがいいんだけど……、

「奈緒ちゃんだって、忙しいよね？ 面倒臭いよね？」

塩崎さんは強引にことを押し進めようとする。

そんなとき、ちよんちよんと横腹をつつかれた。

「ここはね」そう言うと、奈緒に制服の裾を掴まれて引き寄せられる。「まず展開して計算してから、Xでくくって因数分解するのよ」

「え、あ、うん」

さらに奈緒は、僕の後ろにいる塩崎さんへと視線を向ける。

「私も暇で死にそうだったから、これで遊びたいんだけど」

……なんか声が恐いです。

「えー、たまには譲ってよー」

「いいじゃない、あなたは席が隣なんだし」

つまらなそうに塩崎さんが口を尖らせる。

「ずるいなあ、いつも奈緒ちゃんばかり」

奈緒が微笑む。

「私もあなたが羨ましいわ」

塩崎さんがちえっと舌を鳴らして、友達の所に行く。僕はほっと胸を撫で下ろした。ただでさえ緊張するのに、奈緒と塩崎さんがギ

スギスした空気を作るものだからさらに居づらくなるからだ。

「他は、大丈夫？」

奈緒は何事もなかったかのように、再開する。

僕は苦笑いした。

#### 4 話 続 き & a m p ; 5 話

静まり返った教室で、それぞれ頭を掻いたり、ペンをクルクル回したりしながら数学のテストと睨み合う。僕はそんな様子を見回して、改めて奈緒に感謝した。

客観的に見て結構難しいこのテスト。しかし、僕のペンは止まることなく、すらすらとテスト用紙の上を走った。

大事だ、と教えてもらったところがほとんどテストに出ていたのだ。

回答欄が全て埋まったテスト用紙を見て、軽く見直しをする。とはいっても間違いはとくに見当たらず、十五分ほど時間を残して僕は机に突っ伏した。

顔を横に向けると、腕の隙間から机に突っ伏した塩崎さんが、その奥には奈緒が見える。

奈緒は退屈そうに肘をつき、なにも書かれていない黒板を眺めていた。

大学の勉強まで予習が済んでいると言っていた奈緒には、こんなテスト余裕だったんだろう。

あんまり見えていてカンニングと間違われるのも嫌やなので、僕は目を閉じた。

奈緒って、なにも考えてるんだろう。

すごく腹が立つ。

それは、教壇から見下した目で教室を眺める教師せいではなく、このバカみたいに簡単な数学のテストのせいでもない。

……あいつのせいだ。

なにも書かれていない黒板に、あいつが塩崎さんと話しているとき

の顔が写る。頬を赤くした、ニヤニヤ顔。女性恐怖症だから知らないが、私にはあんな顔しない。

考えてたら、また胃がムカムカしてきた。

だいたい塩崎さんも塩崎さんだ。あいつのこと好きでもないくせに好きなフリして。しかも私が夏木くんと付き合ってるとか嘘つくし。

そんなに私が嫌いなのか？ というか、あいつもあんな清楚被ったキャラが好きなの？ 引っ張ってくれる強気な女が好きなんじゃないの？

体の中に溜まった行き場のない怒りが、ため息となって口から出る。

もう婚約指輪も貰ってるんだから、告白でも、プロポーズでもしてくれればいいのに。

……いや、全体告白させてやるんだ。

私 近藤奈緒を怒らせたなら凄いんだから。

永久に私の手の中で踊らせてやるわ。

チャイムが鳴り終わるとともに教室は一気に賑やかしくなる。これから掃除なのだが、皆そんなことお構いなしにお喋りを開始していた。

そんな中、僕は椅子にもたれ掛かり、大きく伸びをした。

「なあ、テストどうだった？」

今たぶん、教室内で一番言われているであろう質問をしてきたのは、青白い顔をした高彦。

「かなり難しかったよな」

と、高彦は苦笑いで続ける。

テストが出来なかったんだ。そう口には出さずに、心の中で哀れみながら僕は言う。

「すごい簡単だった」

正確に言えば『奈緒のおかげ』で簡単だった。それを知らない高彦は、信じられないという表情だ。

「……マジで？」

「マジで」

「お前、そんなに賢かったっけ？」

高彦の焦り顔に、少しだけ優越感を味わう。

「まあ、宿題は一人でやってよね」

高彦はため息を一つ吐き、とぼとぼと自分の掃除場所へと消えていく。

僕もそろそろ行くのかな、と思い席を立とうとする。すると、再び声をかけられた。

「テスト出来た？」

塩崎さんだ。高彦が行ってしまったところに間の悪い。

「あ、まあ、うん」

「そう、さっき勉強してた甲斐があったね」

なんだか塩崎さんの様子が少しおかしかった。もじもじとして、いつものような意地悪もしてこない。

僕は頭にハテナマークを浮かべながら、塩崎さんを見つめる。

塩崎さんは一つ息を吐き、胸に手を添えながら絞り出すような声で言った。

「放課後、ちよつといいかな？」

「えつと……」

今までに見たことない弱々しい塩崎さんは、ピンクに染まった頬をうつむかせ、恥じらうようにしている。僕は訝しみながらも、頷いた。

「ありがと。じゃあ、私掃除行くね」

そう言い残し、塩崎さんは小走りで消えていく。

正直、なにをされるのだろうかと不安だ。

だけど、もしかして、とも思う。

絶対にあり得ないことだが、考えてしまっ。

塩崎さんが……。

……僕に？

その場で立ち尽くしていると、友達に背中を叩かれてハツと我に帰る。

掃除場所に向かいながらも僕の頭はそのことで一杯だった。

告白。

その言葉で思いつく記憶といえば、高彦が告白されたのを冷やかに見に行ったこと。それと、その高彦から言いつけられた、奈緒への告白。……なんだか少し悲しくなる。

だけど、その悲しさは今日で終わるかもしれない。

塩崎さんのあの態度。漫画やドラマでああいう態度をとった女性はたいてい、する。

塩崎さんみたいなのモテる人が、僕なんかには有り得ないと思うけど、どうしてもそう考えてしまう。

どうしようもなく、胸がドキドキしていた。

そう、僕は女子と話したりするのは苦手だけど、女性に興味がない訳ではないのだ。人並みに女性への興味はあるし、付き合ってみたいとも思う。

だから、さっきの恥じらう塩崎さんを見たときドキッとした。

塩崎さん、可愛かったなあ、と思い出す。奈緒だったらああいう表情で言い寄って来た場合はほぼ買だけど、塩崎さんは奈緒のような手の込んだイジメはして来たことがない。大概、直接攻撃だ。

考えていると、余計に『もしかして』の気持ちが大きくなっていた。

あくまでも、『もしかして』なのだが……。

でも、もし本当にされたなら嬉しいなあ、とも思う。

そんな幸せな妄想をしていると、再び、声をかけられた。

「おい、いつまで掃除やってるんだよ？」

「えっ？ ああ、ごめん」

さっき背中を叩かれた友達だ。

彼は呆れたように息を吐く。

「なんか今日、ぼつとしすぎじゃない？ なんかいいことでもあったのか？」

「いいことがありそうな予感がするんだ」

彼はふーんと呟き、言う。

「そう思ってるときは、以外に悪いことがあるんだよ」

結構痛い所を突かれ、僕は苦笑いした。

そうだね。ただの妄想なんだし、あんまり浮かれるのもよくない。有頂天からたたき落とされるかもしれないだから。

……そういえば、前にもこんな経験してたじゃないか。

ふと嫌な思い出が蘇った。

記憶の隅に押し込めていた記憶。

小学生の時に、初めて告白されたときのこと。

その時の映像が一瞬間に流れて、胸が苦しくなった。

「お、おい？」

彼が心配そうにこちらを見ている。

すぐさま記憶を押し込め、平然を装う。

「な、なんでもない……」

奈緒や小学校の同級生達には爆笑されるけど、僕にとってはトラ

ウマになっているほど嫌な思い出。

「なんか顔色わるいぞ？」

「大丈夫」

そう言いながら必死に昨日読んだ漫画のことを思い出し、嫌な思い出から意識をずらす。

変なことを思い出してしまった。せつかく幸せな気分に戻っていったのに台なしだ。

「とりあえず、教室に戻ろうぜ」  
僕は頷き、一気に下がったテンションのまま、教室へと戻った。

帰る前の、いつも長めの先生の話が続く。

その間も、チラチラ隣の塩崎さんからの視線を感じていた。

さっきまでの自分なら、これ間違いない告白だ、とか喜べたけど、今はその視線が恐くなってきた。

絶対なにか企んでるよ、とか思う。

塩崎さんに着いて行ったら怖い男の人とかが待ち伏せしていて、お金とか巻き上げられるんじゃないだろうか。ボコボコにされるんじゃないだろうか。

最悪な未来が頭に浮かぶ。

なにせ女性は怖い。

見た目、仲良くしてる女子達だって影では互いに悪口を言い合ってるし、優等生で真面目っぽい子がイジメをしていたりもする。塩崎さんだってそうかもしれない。

だから考えてしまう。もし告白してきたとしてもあの子のように……と。

帰りたい、と思った。

なにか適当な理由を付けて帰ってしまおう。

そうだ、奈緒に言われて部活に行かなくちゃいけないとか言い訳しよう。奈緒に土下座すれば、口裏合わせてくれるかもしれない。

そんなことを考えていると、先生の話が終わったようだ。

塩崎さんが隣に立っていた。

「あ、あの子……」

もじもじと可愛らしい塩崎さん。普段なら、ああもつ可愛いなあ、とか思うだろうけど、今は思えない。

いつもながら床を見ながら、慌てて距離を取る。

「あああ、あの、ちょっと待って！」

「ん？」

「その、奈緒に……」

言いかけて、塩崎さんに遮られる。

「大丈夫。もう言ってるから」

「えっ？」

出鼻をくじかれ僕は戸惑った。塩崎さんはそんなのお構い無しに続ける。

「さっきね、言っておいたの。告白したいから、借りるねって」

塩崎さんの瞳が、猛禽類のような鋭い光を放った、気がした。

これは……、告白という極上の餌を使った罠だ。僕は思わずたじろぐ。

「人気の少ない場所……。そうね、前使ってた美術室とかがいいな」  
塩崎さんに袖の端を掴まれた。

「えええ、えっと……」

床の方を向いていた視線を僅かに上げる。

「安心して、今までみたいにからかつてるわけじゃないから」

黒髪が淋しげに揺れ、ピンクに染まった頬にかかる。子犬のような潤んだ瞳が、逃げ出そうとする僕の足を引き止める。

「あ、う……」

そんな時、しどろもどろするのが僕の精一杯だった。

## 5話つづき

結局、意志の弱い僕は断ることもできずに、塩崎さんと並んで旧美術室へと向かうことになった。

教室から旧美術室までは結構距離がある。その間塩崎さんは何も話しかけてこず、僕も話を振ることはできなかった。

僕は例によって下を向いて歩いている。

窓から差し込む光は淡い朱を含み、薄汚れた廊下を照らす。廊下に映る多くの人の影は、美術室に近づくにつれて少しづつ消えていった。

五分ほど歩くと、ついに影は二つだけになる。

一歩進むたびに、隣の影のポニーテールが淑やかに揺れるのが分かった。

正直僕は、吐きそうなくらいに緊張している。

美術室はもう目の前だ。

「……つい、ちゃったね」

塩崎さんの声が、二人だけしかいない廊下に響く。

僕は僅かに視線を上げた。そして今更ながら思う。

奈緒はいないんだよね。

旧美術室といえば、奈緒が勝手に僕らの部室に仕立て上げた場所だ。もしかしたら奈緒がいるかもしれない。

そんな考えが、なぜか僕の心を焦らす。

とはいえ、塩崎さんは奈緒に話は付けてあると言っていたし、奈緒もさすがにいないだろう。

僕は一度軽く深呼吸をする。

気付けば、告白される側のはずなのに、自分が告白するように緊張していた。それは、いい意味でも、悪い意味でもある緊張だった。

塩崎さんが扉を開ける。

窓際には布をかけられた像が綺麗に並べられ、壁には古ぼけた絵画がかけられている。中央の開けた空間には、昔使っていたであろう机達をそのまま置いてあり、僕と奈緒の遊び道具がそこらに落ちていた。

夕日は美術室を切なげな赤に染め、場には清流のような静寂が流れる。

塩崎さんはその流れにのせるように優しく言った。

「扉、閉めてくれるかな？」

「あ、うん」

言われた通り、扉をガラガラと閉める。

塩崎さんは一つの机に腰掛け、ぼんやりと宙を見つめていた。

「なんかいいね、ここ」

「そ、そうだね」

「私も毎日ここに来ちゃおうかな」

そう塩崎さんは笑う。

僕は、あははと笑いながらも、きよろきよろと辺りを見回す。物陰に人が隠れてないか、窓の外に人が待ち構えてないか、僕の目はせわしなく動く。

そんな僕の様子を見て塩崎さんは再びクスッと笑った。そして、こほんと一つ咳をすると本題へ入る。

「それでね、話んだけどね」

「うん」

一瞬の沈黙。

塩崎さんは机から立ち上がり、僕の前へと立つ。

「……好きなの」

心臓がビクンと跳ねた。

「私、ずっと前から君のこと好きなの……」

えっと、僕が驚きの声を漏らす時にはもう彼女の顔は見えなかった。後ろを向いて、恥ずかしそうに揺れるポニーテールを僕に向けている。

好き。

僕の頭は、その意味を理解する前に、あのことを思い出していた。最悪の初恋。

くりくりにかールのかかった黒髪に、ぱっちり開いた大きな瞳。ピンク色のかわいい服を好んで着る彼女は、明るく元気で、誰にでも優しく、クラスの人気者だった。

そんな彼女に僕が出会ったのは小学三年の時。同じクラスになったことがキツカケだった。

席が近いというはけではなかったけど、誰にでも積極的に友達になる彼女は、他の人達と同じように僕にも声をかけてくれた。その時はまだ女性と普通に話すことが出来た僕は、悦んで彼女と友達になる。

とは言っても、彼女とは一週間に一度話せるかどうか。

奈緒と並ぶほどに、モテていた彼女には常に周りを男子が囲んでいた。彼女に淡い恋心を抱いていた僕にとっては、なかなか辛いことだった。

よく奈緒にも、止めときなさいと忠告されていたけど気持ちが変わることはなく、月日は流れる。

そしてある日。彼女は突然転校してしまうことになった。

告白するなら今しかない。そう思ったのは僕だけじゃないらしく、彼女が転校するまでの間、怒濤の告白ラッシュが続いた。

登校してくると一人。放課になると一人。学校帰りに一人。

同じクラスの男子から、学年の違う人まで、彼女が転校するまでの一ヶ月間それは続く。

そんな中、僕は告白できずにいた。

いつもタイミングを見計らっていたのだが、勇気が出ない。そんな僕を、奈緒はなにか悟った様な眼で、するなら早く告白しちゃっ

て、とせかす。

それでも意気地なしの僕には告白なんて無理だった。ただ他の人の告白が成功しないことを祈りながら、毎日を過ごしていく。

彼女が転校が明日に迫った日。その日も、僕はなににも出来ずに帰ろうとした時だった。

僕は彼女に呼び出される。

呼び出されたのは体育館裏。何の用か分からなけど、チャンスだと僕は勇んで向かった。

まだらに雑草が生え、使われてない焼却炉がある体育館裏は人気がなく彼女の姿も見当たらない。僕は体育館の裏口にもたれかかり、彼女を待つ。

しばらくして彼女はやって来た。

ニコニコ顔の彼女はウサギのようにぴよんぴよんステップを踏む。それと同期するように僕の鼓動も早まった。

「ごめんね、待った？」

「うん。全然待ってないよ」

彼女を見て、僕は改めて好きなんだなと実感する。そして、告白しなくちゃ、とも思う。

よかった、と彼女は笑い、それでねと前置きをして話を始めた。

「私、君から聞かなくちゃいけないことがあると思うの」

「え？」

「言わなくちゃいけないことないの？」

言わなくちゃいけないこと　それは勿論、告白。だけど、どうして彼女が……？

少し考えて、よくドラマとかでは男から告白してるし、母さんも「告白は男から」と言っていたから、彼女もそういう人なんだろう。そう小学生なりに思い、僕は決意する。

「ぼ、僕は……」

「うんっ？」

「その……あの……」

好きです。その一言が怖くて、どうしても言えない。延々と言えない僕。段々と彼女の笑顔が暗くなる。

「……分かった。じゃあ私が言うね」  
強くなる彼女の口調。

「私は君のこと好き。そっちはっ？」

「ええっ？」

思わぬ言葉に声が大きくなる。

そして僕もようやく。

「僕も……好き！」

血がマグマのように熱くなり、皮膚を透かして真っ赤に染まる。彼女は無表情で頷くと、

「知ってる。さっさと言いなさいよね」

そう冷たく言い放つ。見たことない彼女の態度に、僕はア然とした。

「あ、ちなみに言っとくけど、私はあんたのことなんて別に好きでもないから」

「で、でも……」

いつもの笑顔も優しさも、微塵も見当たらない。

「私ねこの一ヶ月で九十九人に告白されたの、でもどうせなら百人のほうがキリがいいでしょ。だけど百人目がなかなか出てこなかったから、私を好きだっていうあんたを呼び出したの」

僕の混乱は止まらない。

「でも、さっき僕のこと好きだって」

「ああ、アレ。嘘よ勿論。あんたがなかなか言わなくてじれったかったから、カマかけただけ」

彼女はそうサラリと言つと、さらに。

「てか、あんたの名前なんだっけ？」

あんたの名前なんだっけ？

その言葉が何度も頭の中でループ再生される。そしてあの時の、言い表せないほどの悲しみが蘇った。今思い出しても泣きそうになる。

「ねえ、聞いてる？」

「ふえっ？」

塩崎さんはむっとして僕を見つめている。そうだ、今はあの子ではなく塩崎さんが、僕を好きだと言ってくれているんだ。

「ご、ごめん、ちょっと嫌なこと思い出しちゃって」

「……ちゃんと聞いててよ。恥ずかしいんだから」

どうやら塩崎さんは僕を好きになる経緯を話してくれていたようだ。優しいところが好きだとか、話しかけた時に恥ずかしがる姿が可愛かったとか、だからつい意地悪しちゃったとか、聞いていても恥ずかしくなるようなことを塩崎さんはもう一度話してくれた。

言い終わると、塩崎さんは顔を真っ赤にして俯いてしまう。僕はなんて声をかけたらいいかわからず、同じように俯いた。

ここで、あの時と同じように告白を受け入れたら……。

そう思うと心が……。

あれ？ と思う。

「その、答えは落ち着いてからでいいからね」

そう言い残し、塩崎さんはゆっくりとその場から去っていく。

僕は

「……待って！」

彼女を呼び止めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2078d/>

---

僕は彼女の手の中で

2010年10月11日18時35分発行